

[果樹部門]

7. 準高冷地の「ピオーネ」減酸・着色向上のための植調剤満開期1回処理の効果

[要約]

冷涼な気候の準高冷地におけるピオーネ簡易被覆栽培では、ジベレリンとフルメットによる無核肥大のための満開期1回処理は、慣行2回処理よりも収穫果実の減酸が進み、着色が向上する。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 高冷地研究室

[連絡先] 電話0867-66-2043

[分類] 情報

[背景・ねらい]

冷涼な気候で成熟期間の短い真庭市蒜山地域では、「ピオーネ」の酸含量の多さや着色不良が問題となることがある。そこで、植調剤による無核肥大処理方法が果実品質へ及ぼす影響を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. 満開期1回処理(満開時にフルメット10ppm加用ジベレリン25ppm溶液に花房浸漬)は、慣行2回処理(満開時にフルメット5ppm加用ジベレリン25ppm溶液に花房浸漬した後、満開10~15日後にジベレリン25ppm溶液に果房浸漬)に比べて酸含量はやや低く、果皮の着色示度は高い(表2)。
2. 糖度に有意な差は認められず、果房重及び果粒重は、慣行2回処理で大きい(表2)。
3. 着果量と果皮色の間には負の相関が認められるが、標準着果量(1.5~1.8t/10a)の満開期1回処理では、果皮色が上位等級となるカラーチャート値8を安定して上回る(図1)。

[成果の活用面・留意点]

1. 供試樹は、開花期(処理直前)の新梢勢力、成熟期の新梢葉面積とも十分で、岡山県果樹栽培指針で示された標準的な生育である(表1)。樹勢が弱い場合、満開期1回処理では果粒肥大が不十分になる場合があるため、慣行2回処理とする。
2. 処理方法によらず、着果過多(極端な大房、大粒)では果皮着色及び糖度上昇が遅れるため、標準着果量を遵守する。
3. 満開期1回処理では、処理時期が遅いと、果粒が過剰に肥大して着色不良となりやすい。
4. 満開期1回処理では、着粒が安定し、小果梗が短く初期肥大が優れるため、摘粒は早期に実施する。

[具体的データ]

表1 「ピオーネ」簡易被覆栽培における供試樹の生育データ(2014年)

供試樹	開花期 ^z			成熟期		
	開花程度 ^y (0~3)	新梢長 ^x (cm)	葉色値 (房節SPAD)	新梢葉面積 ^w (cm ² /枝)	葉面積指数 (LAI)	着果量 (t/10a)
A	0.3	91.5	46.1	5361	2.26	1.41
B	0.6	95.1	46.9	5860	2.55	1.57
C	0.9	108.2	46.2	5746	2.71	1.65

^z 6月11日(満開日:6月18日)

^y 0:未開花 1:開花はじめ 2:開花中 3:満開 の平均値(n=15)

^x 摘心前(n=15)

^w 8月中旬(果粒軟化後、新梢n=10)

表2 「ピオーネ」簡易被覆栽培の無核肥大処理方法の違いが収穫果実品質に及ぼす影響(着果量1.5t/10a、2014年10月14~16日)

処理方法	果房重 (g)	果粒重 ^z (g)	糖度 (° Brix)	酸含量 ^y (g/100ml)	果皮色 ^x (c.c.値)
満開期1回処理	543	18.0	17.6	0.67	9.0
慣行2回処理	597	20.0	17.4	0.71	8.3
有意性 ^w	*	*	n.s.	*	*

^z 上位等級規格は果粒重13g以上

^y 酒石酸換算

^x 農水省監修カラーチャート値

^w t検定により*は有意、n.s.は有意でないことを示す(p<0.05)

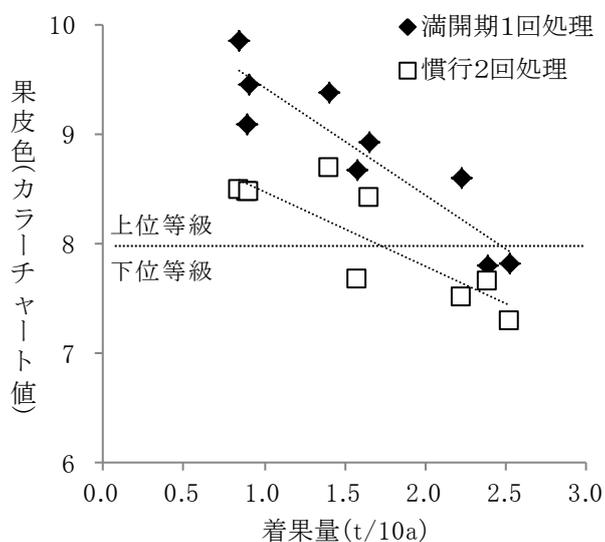


図1 「ピオーネ」簡易被覆栽培の無核肥大処理方法別にみた着果量と果皮色との関係
(2014年10月中旬収穫)

[その他]

研究課題名：高冷地域に適した果樹・野菜・花品種の育成・選定と栽培技術の確立

予算区分：県単

研究期間：2011~2015年度

研究担当者：金澤 淳

関連情報等：[平成14年度試験研究主要成果、19-20](#)